

田舎の病院より

(承前)

水野仙子

けれども病氣は其後もあまり思はしくなく、更にも一つの餘症よしやうを起して、一体どうなつて行くのだらうといふやうな氣を起させた時でも、私は自分で内心満足したほど落着いてゐる事が出来ました。癒なほるかも知れない、癒しからないかも知れない、併しかしどちらでもいゝ、爲なさるべくあるものはすべて爲なされる。若もし重態おちいに陥つて、すべてが絶望である時、初めて自分は自分の眞價しんか——自分が果してどれだけの者であつたかを知る事が出来るだらう。すべての幻影が滅亡する時、初めて自分は自分の眞の姿を見る事が出来るだらう。さう思ふ事が私を慰めました。さうして寧むじろ一面に早くそれが知りたいといふ要求があるのを覺えました。

人間には知る事を與あたへられてゐない數かず多くの事がございます。でいざそれを知る時になつて間誤まごつかない用意を（たとひそれが無益でも見當けんちやう違ひでも）して置かなければならぬと思ひました。私は八方に氣を配りました。その爲めに一頻しきりは、音で知り氣配けはいで察し、目に見ずとも人が

何をしてるのか分るやうに思へて、自分でも持て餘あました位くらゐ神經が鋭くなりました。借りた物を返し、頼む事を頼む機會きくわいを思ひ圖はかり（或は空想あそびし）、これでいゝといふやうにして、さて此體からだを病氣の去來きよらいに委まかせました。

かくして最早もはや祈りに饒舌ぜうぜつは要らない。「主よ、みこゝろのまゝに……」それはまだ残暑と熱とに寢苦しくある夜、靜かに胸に手を當あて、瞑目めいもくする。此時岩間いはまの苔こけを洩もれて落つるやうに靜な一雫しづくが私の頬に傳つたはる。しかしそれは決して／＼悲しみの涙ではないのです。やがてうつら／＼と私は眠る。と間もなく隣りの人の烈しい咳めざに目覺めざまされて、惱なやましげな電燈の光の中に、夜よちゆう不思議な調べをしてゐる水車のひゞきを聞く。此時私は今自分が庇護ひごされるべきものであるのを忘れて、あらゆる惱める者の爲めに祈りたいやうな僭越せんえつな心を經驗するのです。

先生、人は可かなり死んで行きます。この隣室でも、この眞上の部屋でも死にました。夜中やちゆうに、或は曉方あけがたに、常と違つた物音で私はそれを知ります。後で聞いてみると大抵私がやつてゐるのと同じやうな病氣で死んでゐます。けれども私はだんだん快よくなつ

て居ます。ほんとに覺悟してたほどにも進まずに快くなりまして。今では時々廊下の散歩をしたりして、ここから眞直ぐに見える停車場から出て来る旅客の中に、私を訪ねる人が若しあつたら……など、空想してゐます。今では胸部の摩擦音が聞えなくなつたさうですから、此冬さへ越したら大方極りがつくだらうと思つてます。ともかく今度のお正月は此の病院で迎へます。

寝たり起きたりして、どうやらかうやらこゝまで書いて來ました。それでもこんなものに四五日もかかりましたでせう。此中に言つてあるやうな心持ちは、大分先生のお心持ちなぞに遠いでせうけれど、若し安價な信仰と幼稚な心持ちに生きてゐるとでもいう風にお思ひになれましたら、どうか高價な犠牲を拂はずにさほど安價に得られた事と、まだ若くてゐるといふ事とを私の爲めにお喜び下さい。(だけどこれは皮肉に聞えますか知ら) 兎にも角にも病氣が快い事と、格別お氣遣ひ下さる程懊惱してもゐないといふ事とに是非御安心下さいまし。それは時には惰氣ますけれど——水銀が赤い線を越して高くのぼつたりすると——それでも根本では動きませんから。それはほ

んとに思ひやり損をなさる程かも知れません。

先生は今時分はまだ新年物の御執筆にお忙しい事でせう。お揃ひで健康で御年越しの程を祈り上げます。これからそろ／＼こちらにも北國らしい本物の寒さに入ります。奥様にどうぞ宜しくお願いいたします。心細いほど毛が抜けて仕様がございまして。さようなら、あゝ肩が凝りました。——十二月十七日

入力者注…

底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。

「え」の変体仮名は、「え」に置き換えました。

底本：讀賣新聞 大正五(1916)年

十二月二十八日朝刊

テキスト入力：小林 徹

公開：平成二十九年十一月五日

リンク：[水野仙子ホームページ](#)